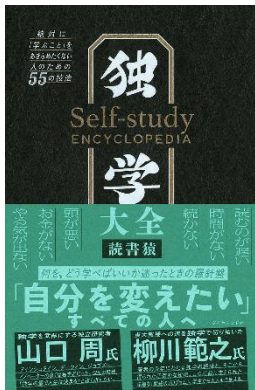


学問の入門書

友國 伸保(ロボティクス学科)



「勉強が(もっと?)できるようになりたいなあ。」あるいは
「(大学の)勉強が何の役に立つのかなあ？」と思ったことはありませんか？

この本はこんな疑問に答えようとしている本です。この本はまるで辞書のようにとても分厚いです。

ですが、全部読み切る必要はない、とこの本の中でも述べられているように、目次やぱらぱらめくってみて、気になるところを読んでみるだけでも参考になるように意図されています。

独学大全 / 読書猿

ダイヤモンド社 2020

この本の内容は大きく2つあると思っています。

一つは、どう学ぶかー勉強をするにはどうすれば良いかという知識です。

基本的に人間は勉強を嫌がるそうです。なぜ、人間が勉強を嫌がるようにできているのでしょうか。その理由として二重過程説が紹介されています。この説によると、人間が数万年前のサバンナで生き残るために長い時間をかけて発達してきた無意識的、直感的な判断を得意とする(古い根源的な)脳機能は、勉強で提示される情報が見慣れぬもの、そして生存に直結しない優先順位の低いものと見なすからとされています。

では、このような脳機能に対抗するにはどうすれば良いか。残念ながら、巷のハウツー本のような「この本を読めばとにかく何でもうまく行くんだ」という解決策は提示されません。(というか、そんなものは無い、と断言されています。)

しかしながら、勉強を継続させるためのヒントが理由を挙げながら、いくつも提示されています。(学校は勉強を継続させるための仕組みであるとも述べられています。)

この本の内容の二つ目として、「知識についての知識」があります。

勉強をするためには、どう学ぶかだけでなく、「何を学ぶか」という知識が必要となります。人と状況によってその時に必要な(学ぶべき)知識は変わります。知識とはなんでしょうか。人間が知識を使って世界を作り替え、より生存しやすく改変してきたのはこの数千年間です。この間に知識は必須のものとなり、知識が無くては世界が維持できないまになっています。知識とは、思い込みや迷信でなく、試行錯誤の結果得られるものです。私たちの日々の生活はこれまでの人々の膨大な試行錯誤の結果に基づいています。

あなたがいまこの文章を読んでいるパソコン/スマートフォンも電気の発見、半導体の発明、ソフトウェア技術や自動計算機からコンピュータへの発展など、過去の人々の膨大な試行錯誤の結果、実現されたものです。

個々の試行錯誤、発明、発見による知識は個人的なものです。また、新しい知識により、古い知識が書き換えられることも常です。このような知識をいかに人類共有の知識にまとめ、更新し、効率的にその知識を必要とする未来の個人に伝えていくか？

これを実現するための手段が書籍であり、学問です。この本では、学問の仕組みと勉強との関係についての知識まで述べられています。(もちろん、図書館の有用な役割についても述べられています。)

このように、勉強の方法や知識についての知識が盛りだくさんですので、勉強や学問に疑問を持たれたことがあるなら、一読されてみてはいかがでしょうか。

本書で紹介されている、ぱらぱらめくだけの「転読」だけでもきっと参考になりますよ。